



2010年3月17日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

腎領域と漢方医学

市立島田市民病院 腎臓内科部長・漢方内科部長 小野 孝彦

(6)慢性腎不全と透析療法中の随伴症対策

本日は「慢性腎不全と透析療法中の随伴症対策」というテーマでお話しします。

慢性腎不全による維持透析の際は、いろいろな随伴症状が見られることがあります。漢方治療は全人的な治療であり、腎機能低下時に成分が蓄積するという報告はあまり見られません。慢性腎不全患者や透析患者さんの上気道炎症状や、うつ症状などであっても、腎機能正常者の場合と基本的には同じです。ただ、慢性腎不全や透析時に見られやすい症状がありますので、そのような随伴症状を中心にお話ししたいと思います。

本日の内容であります。透析患者への漢方治療の注意点、かぜ症候群・急性上気道炎などの場合、筋クランプ、こむら返りであります。次いで皮膚掻痒症例に、そして消化器症状や体力低下、最後に脳神経系症状・睡眠障害・うつ傾向などの場合をご紹介します。

まず、透析患者さんへの漢方治療の注意点ではありますが、高カリウムに関してでありませぬけれども、漢方薬は植物のエキスですのでカリウムが多く含まれそうですが、実際にはそのため使用中止を余儀なくされるケースはそれほどありません。カリウムがやや高めの患者さんに漢方薬を処方する場合は、果物、生野菜などを減らすように説明し、注意深く経過を見る必要があります。むしろ問題があるのは、水分制限ができずに、次回の透析までの体重増加が多い場合です。漢方薬は顆粒の剤形が多いので、粉薬を飲むのに水をたくさん飲んでしまう方には不向きであります。また、粉薬は高齢者ではむせて誤嚥の可能性があるので、ぬるま湯に懸濁する、あるいはとろみをつけて服用するというこゝも考慮をいたします。

次に、かぜ症候群・急性上気道炎の場合であります、肺炎やインフルエンザの可能性もありますので、まずは単純なかぜ症候群かどうかを考慮する必要があります。もちろん抗菌薬や抗ウイルス薬を併用することも可能ですが、ここで注意していただきたいのはNSAID であります。NSAID の使用は頓用にとどめて、例えば毎食後定期的に、そういう定時服用は避けます。これは、漢方薬は暖めて発汗を誘発し、症状の改善を図ることが背景にあるからであります。

具体的なかぜの症候群の場合に使う処方ではありますが、まずは葛根湯。これは発汗がなく、頭痛、発熱、悪寒、肩こりなどで、かぜの初期に約 3 日間ぐらゐまで用いられます。中には前回の飲み残しの葛根湯を飲むような患者さんもおられまして、そのときは早期の治療につながるかと思ひます。ときに胃腸が弱い場合は胃部の不快感を生じることもあります。

麻黄附子細辛湯と桂枝湯の組み合わせ。高齢者ややせ型で、全身の悪寒、特に背中の悪寒が強い場合に麻黄附子細辛湯を使う場合があります。桂枝湯を併せて用いると、体の暖まり方がすみやかです。

小青竜湯。これは水様の鼻汁や、薄い痰、くしゃみ、咳、鼻閉などがあるときに使ひます。

麻黄湯という処方があります。これは汗がなく、高熱が出る、あるいは四肢の関節痛を伴う場合に、インフルエンザに多い症状であります、慢性腎不全の患者さんではあまりこのような症状が出ずに、使う機会が少ないように思われます。もちろん症状が出れば、これは使う機会がありますが、この場合は肺炎やインフルエンザの可能性をやはりチェックする必要があると思ひます。

次に、筋クランプ（こむら返り）であります、この筋のクランプはふくらはぎに多く、数分続いて、痛みを伴ひます。透析患者さんではしばしばこの筋のクランプが起こることがあります。透析中に生じることもあれば、終了して帰宅してから起こることもあります。原因として、カルシウム値の問題、透析によるアシドーシスの補正、大量の水分摂取を背

景にした除水量の多さ、あるいは血管内皮の機能障害なども要因となります。

芍薬甘草湯、通常は頓服していただく薬ですが、慢性腎不全の場合、腎機能は廃絶状態なのですが、電解質の吸収や排泄は消化管の粘膜上皮細胞でも行われますので、甘草のグリチルリチンによりましてやや血清カリウム値が抑制されることも報告されています。

そこで、頻回に筋クランプを生じる場合は背景を検討しまして、頭痛や高血圧があれば釣藤散を使うとか、あるいはいらいらや不眠があれば抑肝散を考慮していただければよいかと思います。

次に皮膚の掻痒症であります。透析の患者さんでは、しばしば皮膚の掻痒症が見られまして、しかも難治性であります。これは皮膚の乾燥や、副甲状腺ホルモンの関与や、ウレミックトキシンの影響なども指摘されています。

艾葉（ガイヨウ、よもぎ）、あるいは茵陳蒿、これはかわらよもぎであります。そういった生薬のエキスからローションを応用するということがもされています。

漢方薬として内服するものには、例えば当帰飲子があります。これは皮膚が乾燥し、分泌物が少なく、掻痒を主体とする処方であります。虚証向きであります。高齢者で応用の機会がしばしばみられます。外観の所見よりも掻痒感の強い訴えがポイントです。

温清飲という処方も応用の機会があります。これは四物湯と黄連解毒湯を合わせた処方構成でなっておりまして、のぼせ、不眠、不安、イライラ感があり、皮膚に掻痒と熱感を伴うような症例に用います。虚実の偏りが少ない場合に応用されます。これは熱感の訴えがポイントであります。

次に消化器症状や体力低下に使われる漢方薬についてご紹介します。

六君子湯は、ふだんから胃腸が弱いとの訴えや、食欲不振、心窩部の膨満感、全身倦怠感、手足の冷えなどのある場合に用いられます。

十全大補湯は、食欲不振や寝汗、顔色の不良で全身倦怠感が強く、衰弱の傾向がある場合。長期の維持透析患者さんでしばしば見られることがあります。

大建中湯は、腸管にガスが貯留し、腹部膨満感とともに腹部が冷えて痛む、あるいは拡張した腸管を触知したり、軽く腹壁を叩打しますと音が **tympanic** に反響してガス貯留を思わせるような場合に目標に使うとよろしいと思います。便秘の改善にもつながります。最近、手術後の腸管通過障害にしばしば用いられていますが、冷えて痛むということをポイントに、術後でない症例にも応用できます。

潤腸湯。これはセンノシドで、用量が多いと下痢をしたり、減量すると効かないなどと用量の調節がしにくいときにマイルドに作用する緩下剤であります。高齢者や胃腸機能の低下している場合に応用の可能性があります。

最後に、脳神経系症状・睡眠障害・うつ傾向についてご紹介いたします。

柴胡加竜骨牡蛎湯は、心悸亢進やいらだち、不眠、著しい白衣高血圧の場合などに用いられます。

苓桂朮甘湯は、めまい、ふらつき、身体の浮動感、動悸、息切れなどの際に使われます。八味地黄丸は、腰痛、坐骨神経痛、下肢の脱力や冷え、下腹部が軟弱無力の場合に使われます。

抑肝散は、不眠や興奮を伴う認知症、あるいはその傾向を伴う場合に使われます。食欲低下があれば抑肝散加陳皮半夏といたします。さらに睡眠障害やうつ傾向がある場合、加味帰脾湯は、不眠や不安感を訴え、顔色が不良で、就床する前から眠れないのではないかと心配するような場合、これは不安感を素直に訴えられない場合もあります。抑肝散は、不眠やイライラする、落ち着きがない、興奮しやすいといったときに使います。

半夏厚朴湯は、不眠、あるいは気分がふさぐ、咽頭部に異物感がある、声がしわがれるといったときに使います。

補中益気湯は、体力の低下とともに気力も低下する、あるいは食欲不振や全身倦怠感やうつ傾向を伴うときに用いられます。

最後に、具体的な症例をご紹介します。

中年期の女性で、糖尿病性腎症の方がおられました。2年前の夏に腎機能障害が進行して、クレアチニンが 4.8mg/dL にて私のほうに紹介がありました。工場で働いているけれども、疲れると喉が乾いて水分摂取がおっくうになるということでありました。前医で投与されていた利尿薬を休薬し、休憩時間での水分補給を心がけるように指導いたしました。

脱水による腎機能障害が落ち着いたけれども、「何のために生きるのか、生きる目的がわからない。それが気になる。先生教えて……」との訴えがありました。

その後、補中益気湯を加えまして、疲労感がとれ、診察室で笑顔がみられるようになりました。生きる目的を突き詰めるのは、ひとまず置くことになりました。その後も継続し、腎機能は1年以上、同じレベル、血清クレアチニン 3.3 で安定いたしました。

生きる目的はわれわれに課せられた根源的な課題でもあります。生きることは、その答えを探し求める旅でもあると思われれます。